

ジュゼッペ・ジャコーザは1847年10月21日にトリノに近いコッレレット・バレッラで生まれ、若いときから劇作家になる夢を抱いていた。ジャコーザは数々の作品を残している。1872年10月16日にトリノのカリニャーノ劇場でジャコーザの「格言」である『A can che lecca cenere non gli firar farina (灰をなめる犬には小麦粉を与えるな)』がペロッティ・ボン劇団により舞台化されたのをはじめ、同年には『Non dir Quattro se non l'hai nel sacco (袋に入れるまでは「4」と言うなかれ)』が初演された。また、文学雑誌の『La Nuova Antologia (新選集)』に『Una partita a scacchi (チェスの一局)』が発表された。

ジャコーザの活発な文筆活動は続き、トリノ以外のイタリアの主要都市でも作品が上演された。舞台化された戯曲のうち、最も有名になったのは中世を舞台にした『Una partita a scacchi (チェスの一局)』『Il trionfo d'amore (愛の勝利)』『Il fratello d'ami (肩を組んだ兄弟)』『Il conte rosso (赤い伯爵)』である。

ジャコーザは1883～1886年には、音楽演劇常任行政委員会の委員を務めた。

1884年にはトリノのボルゴ・メディエバーレの研究と設計に協力。

1885年にはトリノの美術院で歴史と文学の芸術への応用を教えるために教鞭をとった。

1886年には『Novelle e paesi valdostani (小説とバルドスタの風景)』を発表した。この後、『La zampa del gatto (猫の手)』『La sirena (人魚)』『Resa a discrezione (降伏の選択)』『La tardi raweduta (遅れた再考者)』『Tristi amori (悲しき愛)』などの新たな戯曲が発表された。

1891年には、ヨーロッパで名声を博していた女優サラ・ベルナルルのために5幕から成る歴史劇『La dame de Challant (シャランの奥方)』を書いた。友人である女優ドゥーゼの気分を害さないようジャコーザはイタリア語版も用意し、10月14日にカリニャーノ劇場で初演された。しかし、ジャコーザ(ニックネームはピン)はすでにアメリカに発っており、その場にはいなかった。12月2日にはニューヨークのスタンダード劇場で『La dame』が上演された。

2ヶ月のアメリカ滞在中、ジャコーザはさまざまな場所を訪れて慣習を学び、記事を書いた。これは後に『Impressioni d'America (アメリカの印象)』という本にまとめられ1898年に出版された。

ジャコモ・ブッチーニの『Manon Lescaut (マノン・レスコー)』の台本改訂に協力した経験のあったジャコーザは1893年5月、ルイー・イッリカと共同で『La Boheme (ラ・ボエーム)』の台本執筆を開始し、1895年12月に脱稿した。

1894年2月26日、ペローナのヌオボ劇場で喜劇『Diritti dell'anima (魂の権利)』がザッコーニ・ピロット・シアツラ劇団により初演された。

1897年12月には『Castelli valdostani e canavesani (バルドスタとカナベサの城)』が出版された。

また、1896年初頭からイッリカと共同で『Tosca (トスカ)』の台本執筆に取り掛かった。このオペラは1900年1月14日に初演された。

1900年1月31日、ジャコーザの2つめの傑作である喜劇『Come le foglie (葉のように)』がミランのマンゾーニ劇場でティナ・ディ・ロレンツォ・フラビオ劇団により初演された。

1900年末には『Il corriere della sera』の月刊文化誌『La lettura』の編集者となった。

イッリカと協力したブッチーニのための3つめの台本は『Madam Butterfly (蝶々夫人)』だった。

1904年11月25日、ジャコーザの最後の戯曲である3幕の喜劇『Il piu forte (最強のもの)』がトリノのアルフィエリ劇場でグラマティカ・タリ・カラブレシ劇団により初演された。

1906年9月2日、ジャコーザは数ヶ月にわたる闘病生活の末、コッレレット・バレッラの生家で心臓発作のため死去した。

Grazie al sostegno della



Soprintendenza
Speciale al Polo
Museale Romano



Grazie al sostegno della

